

パキスタンにおけるジンナー評価について

——『ドーン紙』を中心に——

土 本 恵 介

はじめに

本稿は、「パキスタン建国者」(Founder of Pakistan)であり「カイデ・アーザム」(Quaid-i-Azam)⁽¹⁾

「偉大な指導者」と称されるムハンマド・アリー・ジンナー Muhammad Ali Jinnah がパキスタンにおいてどのように評価されてきたのかという点について考察するものである。その手がかりとして、パキスタンで発行されている日刊英字紙『ドーン』(Dawn)⁽²⁾において毎年八月一四日付に付録される「独立記念日特集」(Independence Day Supplement)⁽³⁾に掲載されているジンナー関連記事を使用する。一九四七年以降ほ

ぼ毎年この特集は組まれており、今回は二〇〇五年までのものを使用する。⁽⁴⁾

ジンナーに関する論考は、その事跡にふさわしく、パキスタンを始めとしてイギリス、インド、アメリカ等で盛んに発表されてきた。⁽⁵⁾これらの論考を整理しつつ、正確な史料に基づいた事実確定の作業が必須であることは言うまでもない。だが、そういった作業をおこないながらも、パキスタン独立後に、パキスタンに住む人々がジンナーをどのように理解してきたか、という点について考察することもまた必要であると考え

られるのである。死後六〇年以上経た今でもジンナー自身の言動が紹介され、また、同時代の証言者によって繰り返し語られており、ジンナーはパキスタン人に大きな影響を与えていると考えられるためである。ここに示されるジンナー像が史料に基づいた事実かどうかは別として、パキスタンの人々が「国父」(Father of Nation)をどう捉えているかという事実を、我々

第1節 『ドーン』紙「独立記念日特集」の資料としての特徴

1 『ドーン』紙の読者層

パキスタンの国語はウルドゥー語であるが、同時に英語が公用語、または補助言語として、特に社会上層部、知識階層において広く使用されている。⁽⁶⁾『ドーン』紙は日刊英字紙であるため、読者はパキスタン社会の上流に限定されていると思われる。

では、パキスタン人のうち、『ドーン』紙の読者となり得る人々、英語を理解する人々は実際の程度いるのだろうか。これについては、パキスタン国勢調査を用いることによって英語理解者を推定することが可

はしっかりと把握する必要があるように思うのである。本稿は2節よりなる。第1節では資料として『ドーン』紙の「独立記念日特集」の特徴と使用上の留意点について触れる。第2節では、「独立記念日特集」の中のジンナー関連記事を大きく六つに分類した上で紹介・分析し、ジンナーがどのように捉えられてきたかを具体的に論じる予定である。

能であると思われる。⁽⁷⁾ 国勢調査のデータから、パキスタン人の最終学歴を知ることが可能であり、ここから人口に占める英語理解者、すなわち『ドーン』紙の読者層を推定する。⁽⁸⁾ 国勢調査にはもちろん人口に占める母語話者の割合を示すデータがあるのだが、⁽⁹⁾ ほとんどのパキスタン人にとって英語は母語ではないので今回の作業には必要ない。

最終学歴から英語理解者を推定する方法では、英語理解の能力がある学歴層を中等教育 (Intermediate) 修了以上とするか、学士 (B.A./ B.Sc.) 取得以上と

するかで数字が異なる点に注意が必要である。一九八一年のデータに拠れば、中等教育以上を修了している者は全人口に対して一一・六％〔実数一、五一九、〇〇〇人〕、学士以上を取得・修了しているものは五・七％〔同七四三、〇〇〇人〕という差が出るのである。識字率の上昇とともに、⁽¹⁰⁾教育程度も向上していると推測されるが、『ドーン』紙の読者層が社会上層に偏在し、絶対数も少ないことは明らかであり、このことを念頭において分析すべきである。なお、二〇〇七年現在の『ドーン』紙の発行部数は七五万九千部である。⁽¹¹⁾

2 「独立記念日特集」

前述したように『ドーン』紙の読者層は社会上層部に偏在していることが明らかになった。パキスタンにおいて、『ドーン』紙は主要紙ではあるが、この中にパキスタン人全体の考えが反映されているとは言いがたいのである。このような資料の限界性にもかかわらず、『ドーン』紙を利用するのは、独立当日の一九四七年八月一四日以来、毎年独立記念日に特集記事が編集さ

れているからである。それが「独立記念日特集」である。日本の新聞の正月版のようなものといえ、イメージしやすいだろうか。⁽¹²⁾独立後から現在に至るまで蓄積されているこの「独立記念日特集」を使用することにより、パキスタン人のジンナーに対する見解について長期間継続して読み取れるのである。

「独立記念日特集」の紙面数は毎年異なり、過去最大紙面は一九九七年の全三六面三九記事である。一九九七年は独立五〇周年記念ということもあり、このような紙面数となったものと推測される。最も紙数が少ない例としては一九七一年の全四面八記事というものがある。概ね一〇面以上二〇面以下というものが多い。どのような理由から毎年の紙面数が変動するのかは、判然としない。

「独立記念日特集」は原則署名記事で、様々な分野について書かれている。政治、経済、外交関係はもとより、文学や芸術、スポーツ（クリケット）、歴史上の人物など多岐にわたる。⁽¹³⁾ジンナー関連の記事は、「独立記念日特集」全体の規模からいえばわずかな数

である。⁽¹⁴⁾しかし、一九四七年から二〇〇五年までの「独立記念日特集」の中で、ジンナーに次いで関連記事の多い人物であるイクバル Mohammad Iqbal とマウントバッテン Louis Mountbatten がそれぞれ四記事に過ぎないのに対して、ジンナー関連記事はおよそ五四記事にのぼり、群を抜いている。⁽¹⁵⁾

以上のように「独立記念日特集」のジンナー関連記事は資料としてある程度の量があり、かつ同じ枠組みの中に各記事があることから、資料として利用するのにふさわしい一定の均質性があると考えられるのである。

3 ジンナー関連記事

ジンナー関連記事は毎年平均的に掲載されているわけではない。これは「独立記念日特集」の紙面規模ともある程度関係する。⁽¹⁶⁾概観すると、掲載されている年は一記事か二記事であることが多い。⁽¹⁷⁾一九四七年以来一〇年ごとにまとめた場合、一九九七年から二〇〇五年の九年間に二一記事と、集中していることがわかる。

一般的に、ある人物が死亡し、その後時間が経過すれば、故人について語りやすくなると考えるのは自然であるが、ジンナーが人々の記憶から失われることへの危機感もあるだろう。

ジンナー関連記事の執筆者には、学者や法曹関係者、退役軍人、政治家など様々な立場の者がいる。それぞれの立場や思惑を考慮して読み解くべきかもしれないが、『ドーン』紙は一般紙であつて専門的な新聞、雑誌ではない。執筆者が想定しているのは一般の読者であると思われる。いたずらに深読みをせず、書かれていることを素直に読解すればよいと考える。

ジンナー関連記事は、(1)ジンナーに関する執筆者の個人的経験談、(2)ジンナー思想の紹介、(3)ジンナーを利用した執筆者の評論、(4)ジンナーについての歴史的な視点、(5)多様なジンナー論、(6)ジンナー批判に対する反論と大きく六つに分類することができる。ただ、上述の要素がある程度混交しているのが普通である。これらの共通点は、ジンナーに対して否定的な見解がないことである。ジンナーの思想や行

動に対して、ひいてはパキスタン運動に対して全面的に肯定した上で、執筆者各人の論を述べているものが

大半である。これら六つの分類別に各記事を紹介していく。

第2節 ジンナー関連記事から見えるジンナー像

本節では上述した分類に基づいて、各記事から具体的な記述を紹介していく。これにより、各執筆者が描くジンナー像が明らかになるはずである。

1 ジンナーに関する執筆者の個人的経験談

文字通り、執筆者が実際にジンナーと出会った時の体験談である。ジンナー関連記事に占める割合は高くないが、一個人が直接ジンナーと出会い、会話を交わした経験を書いている。

一九五五年の記事「あるムスリム義勇兵がカイデと過ごした二週間^⑱」では、執筆者は、後世において偉大な人物の生涯が忘れ去られることがあるので、それを防ぐ意味でこの記事を書いたという。デカンのハイダラーバード Hyderabad のムスリムと意見を交わすために滞在しているジンナーを同地の出身者である執筆

者が身の回りの世話をしつつ、地方政治や国民会議派の動向について、ジンナーと話をしたという内容である。滞在中、ジンナーは毎日新聞を読み、各地からの通信に留意しており、これほど忙しくしている人を、執筆者は今まで見たことがなかったという。また、ジンナーは滞在中に出会う人すべてから慕われていたといい、執筆者自身もジンナーが示す思いやりや優しさに感激している。

一九九七年の記事「過去を振り返り未来を見据える時期^⑲」の執筆者はジンナーの傍で過ごした経験を有する者であるという。ジンナーの公的側面はよく知られているが、人間としてのジンナーについてはあまり語られていないことが執筆の動機の一つである。たとえば、ジンナーは他人の結婚式の類には一切出席しなかったという。ジンナーのような人物ともなれば関係者

が多すぎて、すべての儀式に参加することは不可能だからである。しかし、執筆者の結婚式には出席するなど、例外もあった。ジンナーは人間としても友人としても素晴らしい人物であると、この時の感激を誇らしげに書いている。

同じく一九九七年の記事「カイデとの旅」⁽²⁾は、執筆者は飛行機「バイキング号」のクルーであり、一九四八年六月二八日にジンナーを東パキスタンのある町まで乗せた時の思い出である。この時執筆者は、ジンナーが体調を崩しているように思ったが、病気とは知らなかったという。ジンナーの死後、死ぬ直前の旅に同行できたことに幸福を感じ、また、愛国心を新たにしたいという。

二〇〇〇年の記事「カイデの思い出」⁽²⁾では、当時青年であった執筆者がジンナーの演説に感銘を受け、直接会って話をしたいと思い、ジンナーが滞在しているホテルに忍び込んで会いにいった話である。執筆者によれば、ジンナーは英語で演説をおこなったので聴衆の多くは内容を理解できていなかったが、全員が魅了

されたようになっていたという。執筆者は英語を理解できるものの、内容が複雑で細部が分からなかったという。少し後になって、父親に紹介してもらった有力者から、ジンナーの滞在中のホテルの部屋を教えしてもらい、会いに行った。しかし、隣室で控えている秘書に見つかり、訪問理由を問われた。花輪を渡したいだけとする執筆者に対して、ジンナーは多忙であり面会希望者すべてに会うことはできないと秘書に断られてしまう。だが、その時偶然にもジンナーが秘書の部屋に姿を現した。ジンナーは執筆者のために予定の会議を三〇分先送りするよう秘書に命じて、ラウンジでお茶を振る舞いながら、パキスタンの将来について語ったという。この時の感激を執筆者は人生最高の瞬間と記している。

以上紹介した記事は、執筆者が直接ジンナーと会い、その時の思い出を語ったものである。ジンナーに対して畏敬と尊敬の念を込めて過去を振り返っている。執筆者たちの特殊な体験談であるが、それだけに具体的な内容であるといえる。若者に対して優しいジンナー

の姿がみえるようである。執筆者たちとジンナーが政治の話をしたのはもちろんだが、偉大な政治家に会えたことそのものに興奮し、感激しているのである。

2 ジンナー思想の紹介

ジンナーはその生涯においてまとまった書物を遺さなかった。よってその思想は各種の会議や講演会などでの演説から求められる。この項目に分類した記事は、ジンナーの言葉と思想を『ドーン』紙読者に紹介することを主眼としている。そのため、いくつかの記事においてはジンナーの言葉だけを掲載し、解説を加えていないものもある。

一九五四年の記事「カイデ・アーザムかく語りき―不滅の言葉⁽²³⁾」では、「組織」・「連帯」・「良心」などのテーマに沿ってジンナーの言葉を紹介している。これは無記名記事であり、おそらく『ドーン』紙編集者が作成したものと思われる。そのため、他の記事の様に執筆者の見解が含まれていないのが特徴である。「組織」の項目においては、「…十分な訓練を積んだ兵士

の如く備えよ。団結心と同志愛を育め：個人であれ国家であれ、勤労・労苦・自己犠牲無くして何事も達成し得ないのだ」という言葉が、また「連帯」の項目においては「パキスタンはムスリム民族の具現化であり、今後とも存続していくことは疑いない：もし我々が自身をベンガル人、パンジャブ人、スインド人としての自分が第一であり、ムスリムやパキスタン人という考えが付随的なものに過ぎないと思うようになれば、パキスタンは間違いなくばらばらになってしまう」という言葉を紹介している。

一九五六年の記事「カイデ・アーザムから学んだ教訓⁽²⁴⁾」では、ジンナーの生涯から教訓として有用なエピソードを選んで紹介している。たとえば、ジンナーが常に新聞を読んで注をつけ、切り抜いたものを本に挟んでおくという習慣を持っていたことに比べて、現在の指導者の不勉強を嘆いている。また、正直さを示す例として、弁護士時代にある商人から五〇〇〇ルピーで弁護を依頼されたが一日あたり五〇〇ルピーを条件で引き受け、三日で解決したのち、約束通り一五〇〇

ルビーを受け取ったというものがある。ジンナーの寛

容な精神を示す例としては次のようなものがある。ジャワハルラール・ネール Jawaharlal Nehru の意見に賛同して、ジンナーを批判する青年がいた。しかしジンナーは青年の率直な物言いにかえって感銘を受け、非難するどころかむしろ賞賛したというものである。

この他にも様々なエピソードを紹介しつつ、ジンナーが世界で有数の政治家であること、ジンナーから学ぶ点が多いことを主張している。

一九八二年の記事「カイデ・アーザムと軍隊」⁽²⁵⁾および一九八三年の記事「平和の持続をカイデは信じていなかった」⁽²⁶⁾においてはパキスタンの建国が称揚された上で、ジンナーがいかに軍隊を頼りにしていたかが論じられる。国際平和や安全についてジンナーは理想に走らず、具体的な方法として軍隊を重要視しており、また、パキスタン総督就任後は多くの演説が国防軍の士官・下士官に向けておこなわれたという。この二つの記事は、ジンナーの思想を紹介するというよりは、ジンナーの言葉で自分の立場を補強しようとする傾向

が強い。

一九九三年の記事「カイデの言葉」⁽²⁷⁾にも執筆者の名は無く、ジンナーの発言を七つとりあげてそのまま引用している。それぞれの発言に見出しはないが、「我々のモットーを忘れてはいけない。すなわち連帯、規律、信頼である」と述べたものや、「あなた方が、あなた方の国家であるパキスタンについて考え、パキスタンに住み、パキスタンのために行動すれば、あなた方はパキスタン人だ」というものがある。パキスタン人としてのアイデンティティー、規律や団結、連帯について語った言葉が多く、前述の一九五四年「カイデ・アーザムかく語りき―不滅の言葉」と似た内容である。

一九九七年の記事「ジンナーのメッセージを想起する」⁽²⁸⁾では「ゴーカーレー Gopal Krishna Gokhale やティラク Bal Gangadhar Tilak、M・ネール Motilal Nehru に高く評価されたジンナーがもし今生きていれば、インドとの間に友好関係を築いたであろう」という執筆者の見解が示され、宗教の自由についてジンナーが述べ

たものを紹介している。

一九九九年の記事「一九四七年八月一日憲法制定議会におけるカイデの議長演説」⁽²⁹⁾は、文字通りこの時の演説を紹介している。執筆者はこの演説をパキスタンの骨格を形成するための理念を述べたものと捉え、重要視している。この演説の論点は多岐にわたり、執筆者がどこに力点をおいているのかは明確でないが、ジンナーは第一に「政府の使命は法と秩序を維持する事」とした上で、公務員の汚職、闇市場、縁故主義の弊害を改めなければならないとしている。第二に、インドとパキスタンの分離独立に全員が賛同していないことを承知しているが、決定したことであるので、各人がそれに従ってほしいと訴えている。第三に、所属やカースト、信仰の違いを問わず同等の権利を持つ国民として共に働くべきであると主張している。

二〇〇〇年の記事「カイデの展望・希望・切望」⁽³⁰⁾ではジンナーの演説を九つとりあげ、執筆者がそれぞれに見出しをつけて紹介している。その内容をいくつか見ると、「イスラームは生活の完全な規範である」と

いう項目では、イスラームとは単に宗教的な信条や教義ではなく、生活のあらゆる面でコーランが総合的な規範となっているのだ、というジンナーの言葉が紹介される。「インドとの関係」という項目でのジンナーの主張は、パキスタンは国際外交のあらゆる面でインドと協力していかなければならないことを訴えつつ、インド政府に対してはパキスタンへの優越感を無くし、同等の立場で扱うよう要望する。「州至上主義の危険性」という項目では、様々な民族がありながらも共通の母国を持つことを可能としたアメリカ合衆国を例にとり、パキスタンもベンガル人、パンジャブ人などといった概念の上にパキスタン人という意識が必要であるとジンナーは説いている。このようなジンナーの演説を引用しながら、執筆者は、自分たちにとってジンナーが最後の拠り所であると主張する。また、議論の余地のない指導者はジンナーだけであることから、ジンナーが考えたことを次世代に伝えていく必要がある。なのでこの記事を書いたという。

同じく二〇〇〇年の記事「藩王国の地位について、

カイデ・アーザムの考え⁽³¹⁾では、イギリスの主権が消失した後にはインドの藩王国は自らの去就を自ら決定する法的権利を有する、というジンナーの考えを提示している。ジンナーはカシュミール問題については、人口八〇％以上のムスリムの心情を藩王や州知事が考慮することを望みつつ、決定権はあくまでカシュミール藩王国自体にあるとする。しかし、実際には、ジンナーの預かり知らない所で、パキスタン側がラシュカール Lashkar 族をカシュミールに侵入させたと執筆者は述べ、この行為がジンナーの政策を根本から脅かしたという。こうして、カシュミールの自治に関しては、ジンナーの政策から大きく外れてしまったことを指摘する。

これもまた二〇〇〇年の記事「カイデ・アーザムとパキスタン人ナショナリズムの概念」⁽³²⁾において、執筆者はパキスタン独立以後、パキスタンにおいて、パキスタン人のアイデンティティーが考えられ続けてきたことを指摘する。そしてジンナーがどのように考えていたかを、ジンナーの演説および記者会見での質疑応

答をとりあげて紹介している。演説は一九四七年八月一日の憲法制定議会でおこなわれたもので、執筆者はこれを「ジンナーのゲティスバーグ演説」と呼ぶ。内容を要約すれば、パキスタン国民はどのような信条・カースト・宗教であつて良いというものである。

他方、記者会見は同年七月一日におこなわれたものである。その場において、パキスタンはムスリムにだけ市民権があつて、他宗教の人々には市民権がないような神権国家ではないのかとジンナーは記者から質問を受ける。それに対してジンナーは、その記者がジンナーの言ってきたことを全く理解していないことを指摘し、パキスタンが神権国家ではあり得ないということとを説明する。

以上紹介したジンナーの思想に関する記事は、関連記事の中で最も数が多く、パキスタン人にとって重要な論点であることがうかがえる。記事の中で「ジンナーが最後の抛り所」とも言っているが、パキスタン人が政治について考える際に土台となるのがジンナーの言葉ということだろう。執筆者たちは例外なく、ジン

ナーの言葉はすなわちパキスタンのあるべき姿、もしくは理想の形を述べたものであると考えている。よって、ジンナーの言葉や思想に疑問を差し挟むのではなく、実行することが必要なのだという認識のようである。ジンナーの言葉・思想がいつまでも語られ続けるということは、それがパキスタンの根幹であるという認識を示すとともに、未だに実現できていないことを示しているようである。このことは後述する。

3 ジンナーを利用した評論

ジンナー関連記事の大半がジンナーの行動や主張を借りて自らの論を展開しているといえるが、ここに分類した記事はジンナーの名声と実績に依拠するところが極めて大きいといえる。ジンナーについて、またはジンナーの思想について論じるのではなく、ジンナーを使って自説を論じているという点から「利用」という言葉を使った。

一九六五年の記事「カイデの意思の履行―アユーブ大統領の模範的記録」⁽³³⁾は、パキスタン建国当時と現在

では、インドやヨーロッパ勢力などに代表される外部の攻撃が続いているという点で似通っているとする。当時にはジンナーがいたように、現在では「国家救護者」

(Saviour of Nation)「パキスタン建設者」(Builder of Pakistan)たる大統領アユーブ Ayub Khan がおり、ジンナーがパキスタンを建設したように、アユーブは国家を救うという内容である。政治的独立の後には経済的独立が必要であると考え、または増大する人口に対して工業化が必要と考える点において、アユーブとジンナーとは同じ見解であることを挙げ、政策の正当性をジンナーに求めている。

一九六八年の記事「カイデとこの歴史的な日」を思い出そう⁽³⁴⁾では、イギリスや会議派の妨害を乗り越えてパキスタンが建国されたとした上で、その後、ジンナーとリヤーカト・アリー・ハーン Liaquat Ali Khan とを相次いで失って混乱の極みにあった国家を救ったのが「一〇月革命」(October Revolution of 1958)⁽³⁵⁾であり、アユーブ大統領であったとする。かつてジンナーが大衆の支持を得ていたからこそ国難に対

処し得たという例を引き、「九月戦争」(September War of 1965)⁽³⁶⁾ を乗り越えたアユーブもまた人々の支持を得ているとほのめかしている。そして、ジンナーが提唱したモットー「信仰・連帯・規律」に基づいて国民が行動すべきであると主張する。以上の二つの記事は、ジンナーの名を借りた、現職大統領支持の記事であるといえる。

ここに分類される記事は、「国父」ジンナーのイメージを否定するものではないという点では他の記事と同様である。むしろ、自らの論を補強するためにジンナーを利用しているために、ここで描かれるジンナーは、他の記事に比べてより肯定的に捉えられている点の特徴といえるだろう。ジンナーの思想や行動が素晴らしいものであったからこそ、同じような状況下において活動するアユーブもまた偉人たり得るのである。ジンナー関連記事においてこのような記事が二つしか見いだせないということは、多くの執筆者たちがジンナーに対して敬意を持っているため、闇雲に政治利用することを拒否しているように思えるのである。

4 ジンナーについての歴史的な視点

『ドーン』紙は一般紙であるから専門的な研究論文を掲載しているわけではない。ジンナーの行った行動や思想について、歴史的な文脈を重視する、または、比較的距離を取りながら客観的に叙述しようとする傾向のある記事をこのように分類したのである。「カイデ・アーザム」という尊称をあえて避け、「ミスター・ジンナー」という記述を用いるものもある⁽³⁷⁾。

一九六四年の記事「カイデ・アーザムと大衆」⁽³⁸⁾は、ジンナーを神が遣わした指導者とする点でジンナーから距離を置いて叙述しているとは言い難いが、ジンナーについて論を展開する上で一八世紀半ばの反体制運動から始めている点の特徴である。紙幅の関係からか、肝心のジンナーについての叙述が少ないのだが、歴代の指導者と比べてジンナーは、運動を成功に導いた点で際立っているとされる。そして、その成功の理由は大衆のエネルギーを正しい方向に導き得たことにあり、大衆運動は大衆自身が自らの目的を定めてこそ初めて成功することにジンナーが気づいていたために、パキ

スタン建国がなし得たのだという。パキスタン建国は一八世紀半ばからの二〇〇年にわたる闘争の終着点という認識である。

一九八七年の記事「パキスタンに関するカイデの最初の考え」⁽³⁹⁾では、ジンナーが一九三七年にパキスタンについて言及しているが、その思想は目新しいものではなく一九一三年以来、ジンナーの基本的な思想の変化は見られないと分析している。すなわち、ムスリムの利益と権利を守ることがジンナーの政治活動の目的だったとする。ムスリムはインド亜大陸における少数派であり、その権利を守るために一九一六年にラクナウ協定が結ばれたという。

二〇〇〇年の記事「一九四五―四六年選挙―ジンナーのパキスタンへの踏切台」⁽⁴⁰⁾はジンナーがロンドンから帰ってきた一九三五年から、ラホール会議を経て、一九四五―四六年選挙を闘ったジンナーの活動について述べたものである。方向性・目的・基盤・指導者など、選挙で闘うにはインド・ムスリムにはあらゆる要素が欠けていたが、ジンナーの尽力により、おおむね

一九四〇年頃には体制が整う。ジンナーは国内外の状況を見据えつつ、積極的に広報活動をおこなって自分の考えを訴えたこと、諸国から寄付を求めたこと、学生組織をまとめあげたことなどについて叙述されている。

二〇〇四年の記事「ジンナー政治哲学の四段階」⁽⁴¹⁾では、一九〇四年から一九四八年までの四五年間をジンナーの公活動と捉える。すなわちインド国民会議へ参加した時期（一九〇四年から一九二〇年）、ヒンドゥー分離主義に圧迫された時期（一九二〇年から一九三七年）、全インド・ムスリム連盟の実権を握りパキスタン建国に至った時期（一九三七年から一九四七年）、独立後、死亡するまで（一九四七年八月一日から一九四八年九月一日）である。執筆者の主張は、ジンナーの経歴を改めて考えることによってパキスタンの取るべき未来が見えてくる、というものである。ジンナー関連記事の中で、ジンナーの生涯をはっきりと段階に分けて論じたものはこれだけである。

ここに分類された記事でも、引用資料の出典が明記

されていないこと、ジンナーに対する否定的な見解が見られないことは、他の記事と同様である。しかし、ここに分類された記事は他の記事とは違い、務めて冷静に叙述しようとする姿勢やジンナーの業績や生涯を改めて考察しようとする態度があるように思われる。

5 多様なジンナー論

ここに分類される記事は上述のものとやや趣が異なり、ジンナーが持つ「建国者」以外の側面に焦点を当てている。

一九六四年の記事「弁護士としてのカイデ・アーザム⁽⁴³⁾」と二〇〇一年の記事「弁護士ジンナー⁽⁴⁴⁾」は、ともにジンナーの弁護士時代を扱っている。前者では一八九七年から一九一七年ごろまでを範囲として関連エピソードを紹介しながら、ジンナーは率直にして毅然な態度と鋭い頭脳を持ち、能力の高い弁護士であったことを述べる。たとえ報酬の高い依頼であっても証拠が足りない場合、または依頼人に後ろ暗いところがあつた場合には躊躇せず断つたという。そして最後には、弁

護士として優秀であつたジンナーは政治的センスも持ち合わせており、パキスタン結束の中心となつたことを叙述している。

同じく弁護士としてのジンナーを扱う二〇〇一年の記事においては、中央インドにあつたムスリム藩王国、ボーパル Bhopal においてジンナーが首席判事 (chief justice) を務めていた際の訴訟について述べる。それは、藩王であるジェーハン・ベীগム Jehan Begam の息子オバイドウツラー・ハーン Obaidullah Khan が、藩王国内の育英資金に用いるため設定した四〇万ルピー分のワクフを⁽⁴⁵⁾、彼の死後、遺産相続人がワクフの無効を訴えたものであつた。ジンナーがワクフの恩恵を受けている人々の側に立つて弁護をおこない勝利を収めたという。この事件を契機として、中央インドのムスリムの間で、ジンナーの名声が飛躍的に高まつたという。

一九九七年の記事「ジンナーとディーナの関係⁽⁴⁶⁾」はジンナーと一人娘であるディーナ Dina との関係が良好なものであつたことを明らかにしたものである。デ

イーナはキリスト教徒のネヴィル・ワディア Neville Watia と結婚したのだが、父・ジンナーの許可を得ていなかったがために、ジンナーに勘当されたと一般に信じられていた。そのため、ジンナーが親子の情に冷淡でかつ独裁的な人物であるという神話ができあがったのだという。娘婿からの手紙とディーナからの手紙が残されているが、それを見る限りでは神話はやはり神話に過ぎず、家庭人として娘と良好な関係を築けなければ、ムスリム大衆の支持など得られるはずがないというのが執筆者の主張である。

一九九二年の記事「パキスタン建国者」⁽⁴⁷⁾ではジンナーが経営者としても一流の才覚を持っていたことが論じられる。独立国家の創設者、機敏な政治家、素晴らしい弁護士、最高峰の議会人であったと絶賛しつつ、この成功の背景には経営術を身に着けていたことがあるという。当初、ジンナーがロンドンに向かったのは弁護士になるためではなく、父親の事業を手伝うため、貿易・ビジネスの技術を身に着けるためであったという。ジンナーは演説の際、言葉を慎重に選び、無駄を

省いたことで知られるが、これも、常日頃から労力と金銭を無駄にしない習慣が培われていたためであった。このような鋭敏な経営感覚が、後に全インド・ムスリム連盟の組織を立て直すことや、『ドーン』紙の創刊につながったという。⁽⁴⁸⁾

以上とりあげた記事は、前に見てきたものと比べて切り口が大きく異なるのが特徴である。弁護士としてのジンナーは比較的知られているが、父娘関係といった私的な面や、ジンナーの成功の背景には鋭敏な経営感覚があったなど、ジンナーをよく知るパキスタン人にとっても目新しい内容なのではないだろうか。

以上「独立記念日特集」におけるジンナー関連記事を六つに分類し、そのうちの五つまでの紹介をおこなった。上述のように、「個人的体験」と「利用」の記事、それに「思想紹介」における執筆者無記名のものはかなり特色があつて分類が容易であるが、その他の記事においては、様々な要素が混在しており分類し難いものもあつた。しかし、分類をおこない、記事の具体的な内容を紹介することにより、パキスタン人がジ

ンナーをどのように見ているか、その視点が明らかに
なったのではないだろうか。

ここですべてのジンナー関連記事を紹介したわけ
ではないが、瞥見の限り、「独立記念日特集」中には、
ジンナーに対する批判的ないし否定的な見解を有する
記事は存在しない。しかし、興味深い事実がある。そ
れは、ジンナーの悪評に対する反論を期して執筆され
たと思われる記事がいくつか見られる点である。

6 ジンナー批判に対する反論

ここで紹介する記事においては「世評ではこういわ
れるが、それは事実ではない、実際は……」という論
の展開が見られる。「独立記念日特集」の記事におい
てはジンナー批判の記事は見られないが、パキスタン
国内の世評には、ジンナー批判があることを示唆して
いる。

一九六四年の記事「パキスタン建国」⁽⁴⁹⁾はジンナーと
イクバルについて論じたものだが、この二人の功績
を過小評価する傾向が最近見られるという。カシュミ

ールを完全にパキスタン領とできなかったこと、西パ
キスタンと東パキスタンとを陸地でつなげることがで
きなかったことが、批判の根底にあるという。むろん
執筆者は二人の偉人を尊敬し、ジンナーたちを批判す
る前に読者・国民自身が自らを鍛えなければならな
いと主張する。また、二〇〇三年の記事「パキスタン
は誰のものかージンナーかイクバルか、それとも？」⁽⁵⁰⁾
においては、ジンナーの死後、宗教指導者たちがパキ
スタンをわが物にしようという動きを見せ、自分たち
の思想を補強するためにイクバルを利用するという
傾向が生まれた。その結果、ジンナーが軽んじられる
ようになっていくという。論ずるに値しない考えとは
いえ、執筆者としてはこれがパキスタン国民に広がる
のは看過できないとし、この記事を書いたという。

先にも紹介した二〇〇〇年の記事「カイデ・アーザ
ムとパキスタン人ナショナリズムの概念」⁽⁵¹⁾では、ジ
ンナーに批判的な人々がジンナーをどのように評してい
るか述べている。曰く、ジンナーのかかりつけの内科
医はムスリムでなく、使用人はヒンドゥー教徒である。

ジンナーの妻は啓典の民ではないパールシー（ゾロアスター教徒）であり、妹もパールシーと結婚した。もう一人の妹は結婚の義務を果たさず、娘はムスリムでない者と結婚した。このような者はムスリムとは呼べず、「カイド・アーザム」どころか「カーフィレ・アーザム」(Kafir-i-Azam)「偉大な不信心者」だ、と言うのである³⁰。むろん執筆者はこのような意見に対し

おわりに

本稿においては、『ドーン』紙の八月一四日付に付録されている「独立記念日特集」内のジンナー関連記事を分析することによって、建国の父たるジンナーがパキスタンにおいてどのように受け止められているか考察をおこなった。

第1節においては、『ドーン』紙が英字新聞のために、読者層の大半が社会の上層部であり、広い意味でのパキスタン人の見解を拾い上げることができないという資料の制約を確認しながらも、一九四七年以後現在まで毎年同様のスタイルで発行されている「独立記

て、ジンナーは頭のとっぺんからつま先までヒューマニストなのだ」と反論している。

以上の記事から、「独立記念日特集」においてジンナーがいづつまでも語られ続けるのは、もちろん建国の父を称揚するという目的もあるが、その裏返しとしてパキスタンにおけるジンナー不信心論に対抗する目的があるように思われる。

念日特集」の等質性は一定の資料的価値があると判断した。

第2節においては、「独立記念日特集」におけるジンナー関連記事を分類・紹介し、いかなるジンナー像が提示されているかについて、資料に即して述べた。その結果、パキスタン人の考えるジンナーとは、どこまでも建国の父、偉大な指導者であり、その見識や思想、行動力に敬意を払わなければならないというものであった。パキスタン建国者として直接述べず、弁護士としての能力や経営に長けていたという別側面を述

べているものがあったが、それもジンナー賛美の文脈であった。しかし同時に、いくつかの記事では、ジンナーに対する悪評に対して反論する形をとっており、ジンナーの業績や美点を繰り返して述べなければいけない背景があることを推測させた。

ここで明らかにしたジンナー像は、いわば政府の公式見解に近いものであろう。今回利用しえなかったが、たとえばパキスタンにおける歴史教科書なども合わせて参照すれば、おそらくジンナーに対する公式見解がより一層鮮明になるのではないかと考えている。それ

と同時に、分離独立により多大な被害を被った人々、または利害関係の薄い人々などは、おそらくこの公式見解とは異なるジンナー像を描いていることと思われる。更に、パキスタンやインドを中心とする専門の歴史研究者はいったいどのようなジンナー像を描いているのか考察する必要がある。特にパキスタン国内においてはどこまで客観的に論じられているのだろうか。以上三点について、今後留意していきたいと考えている。

註

- (1) 「偉大な指導者」の意。略してカイデ The Quaid と書かれることもある。
- (2) 原則八月一四日付であるが、一九四七年の場合八月一五日付であり、これは前日が独立記念日で、八月一四日付『ドーン』本紙にはジンナーのメッセージが掲載されている。一九八〇年は八月一三日付で理由は不明。一九八九年は八月一六日付であり、一四日および一五日は休刊日であったと思われる。
- (3) 一括して「独立記念日特集」としたが、その表記は
 - (4) 一九四八年から五〇年、一九六一年、一九七三年、一九九四年の各年については未確認である。
 - (5) たとえば Hector Bolitho, *Jinnah: Creator of Pakistan*, John Murray, London, 1954. Stanley Wolpert, *Jinnah of Pakistan*, Oxford University Press, New

年によって異なることが多い。単に Independence Day という年もあれば、Pakistan Day としている年、Pakistan at Today and Tomorrow という場合もある。しかしその紙面構成はほぼ同じであるから、すべて同様のものとして扱った。

York, 1984. Ayesha Jalal, *The Sole Spokesman: Jinnah, the Muslim League and the Demand for Pakistan*, the Press Syndicate of the University of Cambridge, Cambridge, 1985. Akbar S. Ahmed, *Jinnah, Pakistan and Islamic Identity: the Search for Saladin*, Routledge, London, 1997. Ajeet Jawed, *Jinnah: Secular and Nationalist*, Faizbooks. com, New Delhi, 2005. Ian Bryant Wells, *Ambassador of Hindu-Muslim Unity: Jinnah's Early Politics*, Permanent Black, Delhi, 2005.

(6) 『パキスタン入門』、日本パキスタン協会、一九九四年、一三九～一四三頁。

(7) 英語を完璧に使いこなせるのは総人口の二%にすぎないとの指摘がある。前掲書『パキスタン入門』、一四三頁。

(8) Population Census Organisation Statistics Division Government of Pakistan Islamabad, *Census Atlas of Pakistan: 1980-81* の中、Literate Population by Educational Attainment and Rural / Urban Residence, Pakistan のいうデータがあり、ここから最終学歴を推定する。

(9) 各世帯別の母語を示すデータがあるが、「英語」の項目はない。おそらく「その他」に分類されている。

(10) 都市部と農村部、男性と女性では識字率に差があるが、一九八一年と一九九八年を比較した場合、パキスタン全域では、二六・二%から四五・〇%まで上昇して

る。Population Census Organisation Statistics Division Government of Pakistan Islamabad, *Population and Housing Census 1998*.

(11) 『ズーン紙』ウェブサイトにあり。http://www.dawn.com/fixed/group/publicat.htm (二〇〇七年七月一六日閲覧)

(12) 二〇〇二年以前のものはアジア経済研究所蔵のマイクロフィルムで、二〇〇三年以降ものは国立国会図書館関西館において原資料を閲覧し得た。「独立記念日特集」は紙面番号を異にし、明らかに別冊の形態をとっている。

(13) たとえば、ムガル朝皇帝アウラングゼーブ(一九六六年特集)やマイソールのティプー・スルタン(一九六三年特集)。

(14) 未確認の年もあるが、「独立記念日特集」内の記事総数は七九〇におよび、各年の平均は一五・八記事となる。

(15) 記事の題目に「ジンナー」や「カイデ」とあってもジンナーについてあまり述べてないものや、逆に題目にはとりあげていないが、ジンナーについて多くの行数を費やしているものがあるため、概算とした。

(16) もっとも、一九九七年は三九記事もありながら、ジンナー関連記事は四記事である一方、二〇〇〇年は一八記事、中六記事がジンナー関連記事であるように、紙面規模とジンナー関連記事の数は必ずしも比例しない。

(17) ジンナー関連記事が掲載されていない年は以下の通

り。未確認の年については省いている。一九五一—五三、一九五七—六〇、一九六三、一九六六、一九七一、一九七四、一九七六、一九七九—八一、一九八五、一九八六、一九八八、一九八九、一九九八年。

- (18) たとえば註(5)で紹介した Stanley Wolpert ‘シムナーの資料集を編集している Z. H. Zaidi などがいる。

- (19) 一九五五年第一二面。Mir Shafee Khaid, “A Razakar’s fortnight with the Quid-i-Azam”. 以下、
「独立記念日特集」の記事を紹介するが、その出典を記す形式は確認の便宜を図って「掲載年」「掲載面」「執筆者」「原題」としている。「掲載面」が複数あるものは、一つの面では記事が収まらないために複数にわたって掲載されていることを示す。たとえば「第五・八面」とあれば、その記事は第五面と第八面に分かれて掲載されているということである。なお、「独立記念日特集」の紙面番号はギリシヤ数字で表されているが、煩雑であるのべつこひではすべて漢数字に変更している。

- (20) 一九九七年第三面。Mahmoud A. Haroon, “A time to look back & look forward”.
- (21) 一九九七年第三六面。K. M. Wickson, “Journeys with the Quid”.
- (22) 二〇〇〇年第一〇面。Iqbal F. Quadir, “The Quid I remember”.
- (23) 一九五四年第一七面。“Thus said the Quid-i-

Azam”.

- (24) 一九五六年第六・八面。Nur Ahmed, “Lessons we have learnt from the Quid-i-Azam”.
- (25) 一九八二年第一四面。Panafoc, “The Quid-i-Azam and the Armed Forces”.
- (26) 一九八三年第七・八面。Panafoc, “The Quid did not believing in peace with strings”.
- (27) 一九九三年第七面。“Saying of the Quid”.
- (28) 一九九七年第一・七面。Stanley Wolpert, “Retrieving Jimah’s message”.
- (29) 一九九九年第三面。“Quaid’s presidential address to the Constituent Assembly on Aug. 11, ‘47”.
- (30) 二〇〇〇年第五面。Liaquat H. Merchant, “Quaid’s vision, hopes and aspirations”.
- (31) 二〇〇〇年第七面。Kazi Ain Uddin Ahmad, “Quaid-i-Azam on the status of princely states”.
- (32) 二〇〇〇年第八面。Abdul Wahed Siddiqui, “Quaid-i-Azam and the concept of Pakistani nationalism”.
- (33) 一九六五年第一・二面。Anwar Husain, “Fulfillment of Quid’s wishes: president Ayub’s exemplary record”.
- (34) 一九六八年第一・二面。Habib Ibrahim Rahimtoola, “Let us remember the Quid and this historic day”.
- (35) 一九五八年一〇月七日に実行されたアユープのク

デターを指す。同年一〇月二七日に大統領に就任。具体的な日付は、近藤治『現代南アジア史研究—インド・パキスタン関係の原形と展開』世界思想社、一九八八年に所収のインド・パキスタン関係年表による。

- (36) 一九六五年九月六日勃発、同月二三日停戦の第二次インド・パキスタン戦争のこと。具体的な日付に関しては註(29)と同じ。

- (37) 「カイデ・アーザム」と「ミスター」の使い分けは実際の程度意識されているかは判断が難しいが、「独立記念日特集」中の記事を見る限りでは、①同一記事中、一貫して「カイデ（・アーザム）」②同一記事中、一貫して「ミスター」、③概ね一九四〇年以前のジンナーについて述べる時は「ミスター」、それ以後は「カイデ（・アーザム）」④規則性なし、という四種類の書き方がある。①は尊敬の念が込められていると見てよいし、逆に②の場合、距離をおいて考察しようという意図が感じられる。③の場合、一九四〇頃を境にジンナーが変化したという認識があるためかもしれない。

- (38) 一九六四年第二面。Anwar Husain, “The Quaid-i-Azam and the people”.
- (39) 一九八七年第一・七面。Mohammad Aziz Ahmad, “The Quaid's first thought on Pakistan”.
- (40) 二〇〇〇年第一面。Waheed Ahmad, “The election of 1945-46—Jinnah's springboard to Pakistan”.
- (41) 二〇〇四年第八・九面。S. K. Alqana, “For stages

of Jinnah's political philosophy”.

- (42) 例外的に、記事の最後に参照文献を挙げたものや冒頭で資料の出典を明示したものがある。

- (43) 一九六四年第一六面。Syed Murtaza Ali, “Quaid-i-Azam as a lawyer”.

- (44) 二〇〇一年第五・六面。Haroon Ishaque Jangda, “Jinnah, the lawyer”.

- (45) ムスリムが子孫その他のために、土地などをモスクなどにいったん寄進して、その用益権の継承を認めさせる制度のこと。ここでは40万ルビー分の株券であった。

- (46) 一九九七年第三六面。Zawwar Husain Zaidi, “Jinnah-Dina relationship”.

- (47) 一九九二年第一・四面。Mukhtar Zaman, “The Founder of Pakistan”.

- (48) 『Z』紙は一九四二年にジンナーによって創刊された。一九四七年から一九五七年にはパキスタン・ムスリム連盟の非公式機関紙でもあった。Hafeez Malik & Yuri V. Gankovsky (eds.), *the Encyclopedia of Pakistan*, Oxford University Press, 2006.

- (49) 一九六四年第六面。Mian Bashir Ahmad, “The Foundation of Pakistan”.

- (50) 二〇〇三年第五面。Whose Pakistan?—Jinnah's, Iqbal's or?”.

- (51) 二〇〇〇年第八面。Abdul Waheed Siddiqui, “Quaid-i-Azam and the concept of Pakistani nation-

alism”.

- (52) シンナーに対する批判として「カーティレ・アーザム」(Qatili: Azam)「偉大な殺人者」という言い方もある。Ajeet Jawed, *Jinnah: Secular and Nationalist*, faizbooks.com, New Delhi, 2005, P.238.